

によるゆりかご機能が維持されることを確認した。

9月11日コロナ禍で参加人数を絞り実施した生物観察会では、ザリガニから隔離した筏で、中型魚からの隔離効果も相まってヤゴ、エビ等多くの水生生物の生育を確認できた(図2)。これら技術を改良することにより、ザリガニやヘドロと共存できるゆりかご機能

を展開し、多くの魚類にも魅力的な内湖に変えられる可能性が出てきた。これらの実験結果と考察内容を共有するワークショップを9月18日に実施した。催しは翌日の京都新聞滋賀版に取り上げられた。また、本年11月にリモート開催される世界湖沼会議にて、活動成果を発表することが決まっている。

●第31期プロ・ナトゥーラ・ファンド助成(特定テーマ助成)

奄美大島におけるナイトツアーのオーバーユースの影響と対策について

鈴木真理子(アマミノクロウサギ研究会)

奄美大島ではアマミノクロウサギなど夜行性の野生動物の観察を目的としたツアーが増加しており、特に奄美市道三太郎線周辺では野生動物の交通事故の増加や利用者間のトラブル発生に対処するため利用調整が行われている。昨年から今年にかけて台数制限などの実証実験が2回行われた。実証実験中とその前後のアマミノクロウサギの出没頻度を比較したところ、調査期間を通して大きな変化は見られなかった。緊急事態宣言による観光客数の低迷が影響したが、年間を通し

たアマミノクロウサギの出没と両生類・爬虫類の交通事故発生における交通量との関係について考察する。また、地元住民とガイドがどのように利用調整の取組を受け取っているのかについて聞き取りを行った。開始初期ではガイドと住民の利用形態の違いが明らかとなったが、2回目の実証実験後では両者ともルールに対して受け入れる姿勢が見られた。一方で、予約等のルールが固まるにつれて他地域への分散や意思決定の場への住民の不在が問題点として顕在化した。

●第31期プロ・ナトゥーラ・ファンド助成(国内活動助成)

天然記念物エラブオオコウモリの保全・啓発活動

—生息地(口永良部島とトカラ列島)島民による持続的協働体制の構築と実施—

山口英昌(エラブオオコウモリ保全・啓発活動プロジェクトチーム)

第31期プロ・ナトゥーラ・ファンド助成の採択をいただきながら、コロナ禍のために断念したプロジェクトの報告です。対象としたエラブオオコウモリは、口永良部島とトカラ列島に生息しており、両地域の住民が一丸となつての保全・啓発活動が必要との想いで助成申請しました。

口永良部島では、島民有志の「子々孫々の口永良部島を夢見るえらぶ年寄り組」(略称 えらぶ年寄り組)が中心となり、本亜種の保全・啓発活動を続けています。2014年からは、環境省の事業委託を受けて、生息数や食痕調査、糞や食痕からのDNA分析(分析は研究者)、看板やリーフレットの作成、アンケートによる意識調査、研究者

の講演会などを実施してきました。

断念した採択プロジェクトは、トカラ列島の島民の皆さんと協働して、広域的な保全・啓発活動を構築しようとするものでした。折あしくコロナ・パンデミックの為に、実施を1年間見合わせてもらったのですが、事態は好転せず採択プロジェクト実施の断念に至りました。再チャレンジしたいと存じます。

*「えらぶ年寄り組」ホームページ
<https://kuchinoerabu-jima-senior.org>

コロナ禍で、残念ながらプロジェクトの実施を断念した団体の活動紹介です。代表者ご本人の希望により掲載しております。